

| | |
|--------------------------------|--------------------|
| 研修報告書 | 報告者職業 保育士 氏名 岸川 和繁 |
| 受講日 10月17日、18日、19日 | 会場 ニュージーランド 現地研修 |
| テーマ ニュージーランドの保育・ラーニングストーリーについて | 講師 内山ヨーリー先生 |

ニュージーランドはどんな国か

◎1840年建国・1947年独立
◎人口約424万人（2013年国勢調査）
(横浜市370万人)
◎平均寿命：男性79歳 女性83歳
◎民族（2013年国勢調査）
歐州系（74%） マオリ系（14.9%）
太平洋島系（7.4%） アジア系（11.8%）
その他（1.7%）
◎公用言語：英語、マオリ語、手話
◎1893年 婦人参政
1985年 女性事業省設置
◎国土：オホテアロア（白く長い雲のたなびく地）

ニュージーランドの乳幼児期教育を学ぶ上で欠かせない歴史

1642年 タスマン（オランダ人探検家）により発見
1769年 クック（英国人探検家）南北両島を探検
1840年 英国代表と先住民マオリの伝統的首長との間で「ワイタンギ条約」署名（これにより英国はNZを自国植民地に）
1907年 英国自治領となる。
1947年 英国のウェストミンスター法典
(英国会議から独立した立法機能取得)

ニュージーランドの今

- ・教（幼）保一元化
- ・教育省の管轄
- ・義務も教育も生涯学習・発達
- ・多様な乳幼児教育保育施設
- ・子どもからの教育
- ・子どもに聴き入る教育

1) 幼保一元化

1980年半ば 社会的公平・公正の促進
経済成長

1986年 幼保一元化
保育分野（社会福祉部）と教育分野（教育部）
の二元管轄から一元化へ

1988年～ 幼保統合型教員養成の開始
・有資格教員：養成機関で資格を取得（ディプロマ）
・登録教員：資格取得後レポート提出登録証明取得

1990年～ 教育評価局による外部評価

3) 保護者のイニシアティブ（エンパワーメント）

民間主導・行政支援の運営と親の直接契約
・親が関わることの重要性
◎親が子どもの保育に関わることは、親も子どもについて多くの学び、親自身が成長する理念。
◎政府・自治体が支援する保育施設
・プレイセンター
・コハングレオ、コハングフンガ
・家庭の保育サービス（家庭内保育施設）
・プランケット協会（子育て支援協会）

保育幼児教育施設（機関）の多様性（認可施設）

| 幼稚園(Kindergarten) | 料金：半日3~4歳 地域ベース |
|--------------------------------------|--|
| プレイセンター(Play Centre) | 保護者生徒で遊び場に接続、有料（政府・自治体から補助） 組合/パートナーシップセントル/公民館 |
| 保育センター(Education & Care Centre) | 日本の幼稚園に近い（半日／全日）有料・0~5歳個人/組合/NPO |
| 家庭的保育サービス(Home-based EC Service) | 家庭：コドモルームが個別・時間や子ども年齢は様々・有料 |
| 通信制学校(Correspondent School) | 遠隔地/効率/特徴なニーズ・Eラーニング教材等教師送り宅配 |
| コハングレオ(Kohanga Reo) | マオリ文化/言語の継承/有料・0~5歳 |
| コハングフンガ(Kohangahunga) | マオリ文化/言語の継承と英文化/言語 |
| 南太平洋島言語グループ(Pacific Island EC Group) | サモアトニア・クック諸島・斐济の文化/言語継承 |

乳幼児教育カリキュラム「テ・ファリキ」

テ・ファリキの制定への背景

- 1) 女性の社会進出
- 2) マオリ・南太平洋諸島の子どもの教育水準向上課題
- 3) 幼保一元化：多様性と統一性（普遍性）のバランス
- 4) 子どもと親と保育者の見直し

↓

- ・子どもは、
有能で自信に満ちた学び手であり他者と関わる人
心・身体・精神において健全
- ・穏やかな所属感（帰属感）を持つ
社会に貢献するという自信を持っている
- ・カリキュラム（保育とは）、
子どもたちの学びと発達を促すためにデザインされた環境のもとで、
生じるあらゆることを指す。
- 直接・間接的に生じた経験・活動・出来事などをすべてを描き表す

4つの原理

1. 全人格・全調和的発達
・子どもの発達の複雑性
・文脈にある子どもも理解、身体と心と精神（靈性）の調和
2. エンパワーメント
・子どもの声を重視（子どもによるねらい・評価）
3. 家庭と地域
・子どもの社会文化の理解の重要性と学び
・（関係性）互恵的、呼応的関係
4. 関係性
・ヒト・モノ・コトとの双方的関係による学び
・分かち合い⇒話し合い⇒再訪⇒変革

子どもの大切にしていることを可視化する

↓

子どもの育ちを分かち合う奇跡ポートフォリオ

・子どもの「今」を描き表す進行形の記録
・学びの記録であり、綴じられた写真や物語から子どもの力強さと興味を映し出す
・ポートフォリオが果たす役割

※長期間に亘る学びのドキュメント（文書、記録）すること
※関係性と関わりを反映した子どもの学びの評価すること
※学びのプロセスにおける自己評価力の発達発展すること
・繋ぎのツール：子どもが乳幼児教育保育施設から小学校へと移行への関係性を構築する手段

子どもの学びを分かち合う「ラーニングストーリー」（学びの物語）

・物語ることは、考えを表現し、意味づけする方法である
(ジェローム・ブルナー)

- ・「NZに広まった『学びの物語』という保育哲学は、私たちが必要としていた方法を与えてくれたのである。」
- ・物語るという評価の形式をとることで、私たちは、自分の信念や価値観、子どものつながりを共有することができるようになる。
- ・また、カリキュラムの枠組みと学習理論を結びつけて考えられるようになる。
- ・保育者（教師）は、「学びの物語」を共有することで、自らの実践をさらに深く考究するよう問われる。また、教えと学びの過程を理解し、言い表す新しい方法を探し求めようという意欲を持つことになる。

③

ウェンディー・リー先生 講義 ラーニング・ストーリー 授業者のひみつ

ニュージーランドの幼児教育カリキュラムである「テ・ファリキ」が目指す子ども像や、大切にしている価値観・・・

学びの成果という

「幸福」

「所属感」

「コミュニケーション」

「貢献」

「探求」

の五つの要素が織り合ったものとしてとらえている。

そこでは、断片的で文脈とは無関係な学校に適応するためのスキルを身につけることではなく、「学びの構え」を育むことを目標にしている。

学びの構えの5領域

「関心を持つ」

「熱中する」

「困難や、やったことのないことに立ち向かう」

「他人とコミュニケーションをはかる」

「自ら責任を担う」

ラーニングストーリーとは

子どもの「できないこと」(望ましい発達のゴールに達していない点)に注目する

「欠陥を基礎とした評価」に対し、ラーニングストーリーは、

「日々の子どもの様子を観察し、「子どもの有能さ」(やろうとする、熱中していること)に目を向けた「信頼を基礎とした評価」である。

ラーニング・ストーリーを実践していく上での4つのプロセス

- ・学びを捉える
- ・話し合う
- ・記録作り
- ・次にどうするか判断する

ラーニング・ストーリーの子どもを捉える5つの視点

- ・何かに関心を持った時
- ・何かに熱中している時
- ・困難に立ち向かっている時
- ・自分の考えや気持ちを表現している時
- ・責任をとる時 (他の人の手助けや、何かに貢献しようとする時)

ラーニング・ストーリーは、単なるプロセスではない。

その裏に様々な学びがある。

この瞬間だけを表現しているのではなく、

ここまで自分の自分を表現している。

ラーニング・ストーリーとは、自分の教育のアイディアを、
子、親に伝える。あなたはどういう価値を持っているか。

ウェンディー・リー先生の突然の質問

「あなたは、練習すれば歌手になれますか?」

(苦手なものも、挑戦すればできるようになりますか?)

↓
ほとんどの日本人は「できない」と答える。

↓
日本の子どもは自尊心が少ない。

↓
教師は問題視する必要がある。



④

ラーニング・ストーリーで子どもの可能性、できること
思って観察を進めていく。

↓

子どもと親に伝えて行く。(ポートフォリオ、ドキュメンテーションなど)

↓

子どもが自分を評価するようになる。

「がんばれば、なんでもできる」という

マインドセット

↓

学ぶ事を書くようになる

子どものストーリーを見出し、誰かが分析して、どんな学びがあったかを考えないと、ラーニング・ストーリーにはならない。(良い話で終わってしまう。)

↓

知能はどんどん広がっていくでしょう

自分は、自分の学びをしっかり持っていると自信がつく。

才能が育っていく

「人は何を書ったか、したかを忘れる。

でも、どういう気持ちだったかは忘れません」

アンジェロ

ラーニング・ストーリーの役割

- ・自分の物語を確認し、共有する、感動し合う
- ・自信を持つ人間になるため
- ・学ぶ人になるため
- ・子どもだけではない、大人にも言えること。

ラーニング・ストーリーの特性

- ・学びそのものが成長を促進する
- ・参加することでどんどん変化していく
- ・学ぶことは一直線でなく、複雑であることへの気づき

描き方

- ・見たものを書く
- ・肯定的に、ポジティブに書く。(できないことより、できること)
- ・場所、物、人とのつながりを描く
- ・子どものためでなく、家族、地域のためにも書く
- ・全体的に見ながら、意味のあることを見つけていく

ラーニング・ストーリーの大切な3つの要素

- ・気づき
- ・話、写真
- ・認識、学びの分析 (何を学んでいくか)

↓
学びを可視化して、家族に伝えて行く。

学びを学んでいくことが大切 (好奇心、つながりなど)

↓
学び続ける強い心が育つ

他の人と自分の学びや成長を共有することで自己肯定感が向上する。

最後に・・・

「情熱を持って、子どもの学びを見てみて下さい。」



(5)

研修を終えて

今回のニュージーランド研修では、保育の可視化をするためのラーニング・ストーリーをどのように、幼児教育で取り入れているかに着目して、参加してきました。そもそも何故、保育の可視化がこれほどに重要視されているか、保育所の観察や、ウェンディー・リー先生の講義を聞いていくうちに、わかつきました。「子どもは、一人ひとり何かに挑戦したり、何かを知ろうとする有能な学び手である」という言葉が印象的でした。その尊い学びや挑戦を、いかに保育者が気づき、文章化し、写真として記録し、子ども、親に伝えていくかの重要性に気づきました。現代の日本人の子どもは、自己肯定感が少ないという現状を踏まえても、ラーニング・ストーリーは、大きな役割を果たすものだと思いました。子ども自ら発見し、学んだことを保育者や親と共有して、学ぶこと、そのものに意味があると気づき、学ぶことが愛おしく思う。そんな考えが子どもの中で芽生えてきたら素敵なことだと感じました。私たちが、日々保育をしていく中で、「この子どもたちにはどんな発見や学びがあるのか」を觀察し、その学びをいかに分析し、次に繋げていけるか、これは、どんどん実践していくないと、身に付かないスキルでもあると思いました。ウェンディー・リー先生が、講義の最後に話されていた、「情熱を持って子どもの学びを見てみて下さい」というメッセージには非常に共感できる部分がありました。この研修で学んだことを、日常の保育の中でも活かし、子どもの成長や学びを、記録として表し、子どもや、その保護者とも共有していきたいと思います。





動

この中から1日3つを活動に取り入れる

どの保育室にも、クラスでの活動がわかりやすく掲示してあり、保護者の可視化をしていた。どの場面で写真を撮るかや、どんな文章で伝えていくかは、その子の担当職員や、クラスの担任の視点ですでめていく。また、このキンダーケアでは、Eメールシステムを使ったEポートフォリオを作成し、保護者が自分のパスワードを所有して、いつでも閲覧可能となっている。

視察風景

センター)

(有料) 0歳~5歳までの子どもを預かる。このキンダーケアでは、3クラスに分けられている。進級するタイミングは子どもによって違う。(自信のない子どもなど)

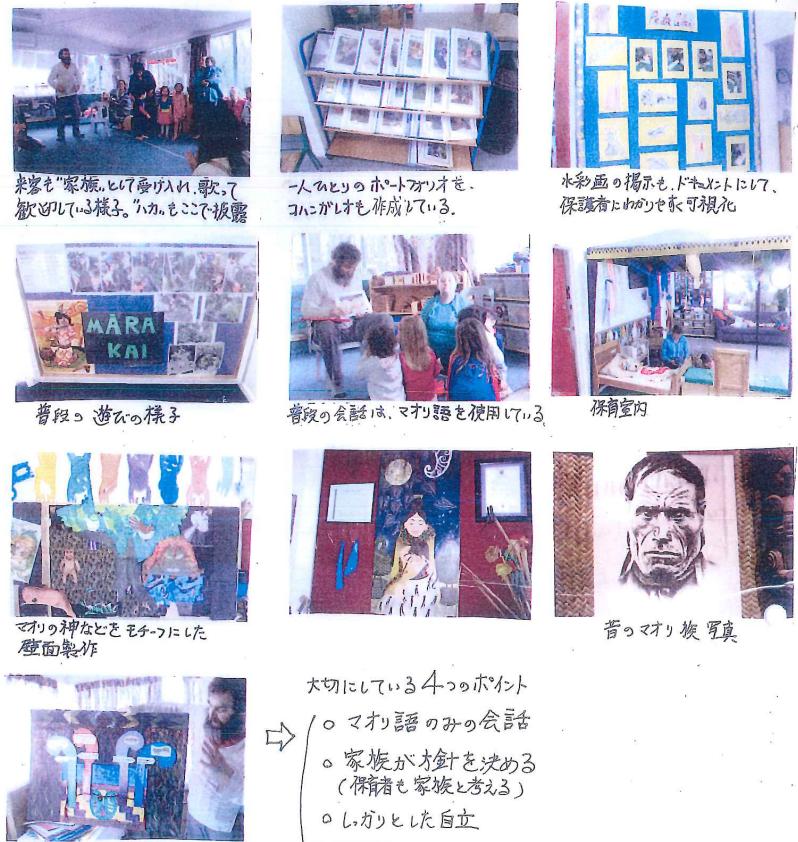
親と保育者の話し合いのもと、進級時期を設定する。



No.4 コハングラウ

マオリの伝承を伝える機関。0歳から5歳までを対象とする。

マオリ族でなくとも、入所可能。



大切にしている4つのポイント

- ○ マオリ語のみの会話
- 家族が才針を決める(保護者も家族と考える)
- しめりとした自立
- 安全・健康を考える(養成など) (マオリ族にはヘビースモーカーが多いため)

No.2





ニュージーランドの乳幼児教育・保育を語る時に、マオリの

No. 6

グラモーガンスクール

日本でいう小学校の役割。0学年から6学年まである。0学年とは、保育所から進学した子どものための学年。自由遊びを中心のカリキュラムを取り入れ、少しずつ集団でのカリキュラムを取り入れていく。
親、子ども、教師と話し合い、0学年から1学年に進級していく。



大切な5つの要素

- 思考力
 - “他”との関係性
 - 自分をコントロールする



科学と算数の授業 → ブロックを水でぬらし、乾く様子を觀察
同時に個数を数えるなど、算数の要素も含んでる



一人ひとり持参したランチボックスを
出して、昼食を食べる

諸の意向から、
海を体験し、
登級することもある。